

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン＝ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

第3セッション 総合討論

◆パネリスト（発題順）

アン・ウェイマイヤー

マーク・マクナリー

ジョン・ベンテリー

マセ・フランソワ

魯成煥

◆コメンテータ

ヘレン・ハーディカ

◆司会

井上順孝

【司会（井上順孝）】

時間がまいりましたので、第3セッション総合討論の部に入らせていただきます。

この企画をした側としては、これまで非常に実りある議論ができたことを非常にうれしく思っております。いささかでも宗教が絡まるような議論のときには、時々、神学的あるいはイデオロギー的な主張が混じって感情論が展開されたりする場合もあるようですが、今回は学術的な観点からという趣旨を最初に申し上げました。そして実際の討議も概ねそのような立場からのもので、非常に実り豊かなものだったと思います。この総括討論ではさらに、どういったことが今後の研究課題になるのかを確認していきたいと思います。

最初にヘレン・ハーディカさんに各発題についてのコメントをいただき、それに対して、できればお一人お一人から簡単に応答をしていただき、さらにできるだけ早い段階でフロアに議論を開き、総合討論という名にふさわしい展開にいたしたいと思います。

ハーディカさんは前回のシンポジウムにも来ていただきましたし、神道研究は長くやっておられます。コメンテーターにふさわしい方をお招きしたかと思います。それでは、よろしく願いいたします。

I. コメント

ヘレン・ハーディカ

ただいま紹介に預かりましたハーディカです。第1回のシンポジウムに引き続き第2回にお招きいただき、大変光栄です。冒頭に井上先生が第2回の趣旨の説明で、「今回のシンポジウムは、翻訳にかかわるミクロレベルもマクロレベルの問題も取り上げる場である」とおっしゃいました。昨日、今日、聞かせていただいた5人の発題者は、具体例を通して神道関係の文献・古典の翻訳作業にあたって、それぞれが経験された問題についてミクロ・マクロレベルの話をされました。誠にバラエティに富んだいろいろな問題、多数の観点から論じられたお話は大変ユニークなシンポジウムになりました。また、出席者の皆様も加われ、とても活発な質疑応答が展開しました。

私のコメントは主にミクロレベルに集中し、発題者それぞれのご発表について自分なりに印象的だったポイントを話させていただき、それから、ごく短くマクロレベルの問題へと進行させていただこうと思っております。慣れない役目を片言の日本語でチャレンジしますので、耳障りなコメントをどうかお許しくださいますよう、よろしくお願いいたします。

まずは、ウェイマイヤー先生の、「翻訳で失われて残念だと思った本居宣長の『古事記伝』一の巻」ですが、井上先生が設定したシンポジウムの趣旨に沿ってウェンマイヤー先生がいくつかの翻訳の難点を取り上げられました。最初に取り上げた、原文で表記が違っても言葉が同じ場合に出てくる問題ですが、実はそれ以前の問題が潜んでいるのではないかと

思われます。

と申しますのは、いわゆる漢字圏と非漢字圏の問題があります。「漢字」という文字には、言語学者ではない私が単純に見て少なくとも3つの要素があります。それは、文字ごとに伝わる意味と音声と、その文字を見てとれるイメージ、ニュアンスがあります。しかしながら、漢字圏の言語を非漢字圏の言語に翻訳する場合、非漢字圏の音声表記法の違いによる翻訳の難点があります。アルファベットでは意味と音声伝わるが、文字そのもののイメージやニュアンスがありません。アルファベットのAかJかQには言語ごとの音声はあるが、イメージ、ニュアンスがありませんので、アルファベットを利用して漢字文字のニュアンスの伝えようがありません。

よって、漢字圏の言語を非漢字圏の言語に翻訳した場合、ウェイマイヤー先生がおっしゃるとおり文字の一部がどうしても失われます。後ほど魯先生のコメントのときに、この問題を改めて取り上げたいと思います。いずれにしても、漢字の問題は神道に限られた問題ではなく、文学にも大いにあるはずで。例えば、三島由紀夫の文学作品によく見受けられる独特の漢字の慣用法、語法が三島文学の魅力の1つであるが、日本語の読者のそのような快楽が非漢字圏の翻訳の読者にどうしても伝わってきません。

次はマクナリー先生のご発表ですが、先生がハーバーマス論にピントを合わせ、翻訳者と翻訳の対象になる著者の主観性のずれによって1つの言語は同時に多数の言語である、というポイントはとても興味深かったです。また、「国学」という単語の翻訳に当たって、*nativism*、*National Learning*、*National Studies* その他の訳語は英語圏では意味が通じないか、あるいは空洞化された言葉、思想より「外国嫌い」の意味が伝わるという、さまざまな問題があります。「国学」のことを「*nativism*」に翻訳するのはいま主流になっているが、「*nativism*」の語彙を辞書で調べると、「先住民保護政策」という定義が出てきます。「国学」の英語圏でのさまざまな翻訳用語が、いかに誤解を招くのかとつくづく思いました。かといって、「適切な訳語がなかなか見つからないから、では、ローマ字にしましょう、とあきらめるのもまだ早い」と、島菌先生がおっしゃいました。やはり、ローマ字化された外来語、借語ばかりに頼ると、雑誌の編集者・出版社などが嫌がって、原稿が公にされるのがますます難しくなる一方です。

マクナリー先生が取り上げた具体例の多くは、ご自分の学位論文の出版に当たって、原稿が、ハーバード大学のアジアセンターの評価委員会にかけられたプロセスで出てきた例だったかと思います。そこで、先生が委員たちから勧められた訳語の中で、問題をさらに悪化した提案がたくさんありました。

例えば、“*eschatology*”、“*apostolic succession*”などを国学の文献に取り入れたら、まさしく本居宣長が指摘した、翻訳によってもとの思想が歪む、という恐れが大いにあるようです。

実は私もアジアセンターの出版プログラムの委員を務めておりまして、マクナリー先生が苦勞されたプロセスを改善しなければいけないと申し訳なく思います。また、正統性のことを *orthodoxy* に訳するか。いつの間にか宗教的なニュアンスが伝わってきますが、国

学の場合には、「正統性」を保証する具体的な組織が存在したかどうかは、翻訳の仕事自体を超えた歴史的な話になるかと思います。正統性を保証する組織がなかった場合、さまざまな国学の説の正統性の保証がないとなると、どれが orthodox か、力争いによって決まるものになるのか、実際どうだったのか。そこで、翻訳者が判断しなければいけない。結果的には、翻訳と歴史的知識がこの問題で切り離せない関係にあるようです。

次はベンテリー先生のご発表ですが、『日本書紀』の翻訳経験を踏まえたお話でした。翻訳の目標は、翻訳者がテキストの意味・発想を把握し、外国語に移すことで終わらないで、原文の言語学的な複数の要素もできるだけ直接的に伝えることだとおっしゃって、ご自分の翻訳者としての目標を極めてストレートにはっきりおっしゃったことはとても印象的でした。英語圏では、少なくともベンテリー先生の翻訳ができるまでは、約 110 年前のアストン訳に参照するしかありませんでした。私もアメリカで日本宗教の授業テキストの 1 つとして、学生にアストン訳をずっと読ませてきましたが、アストン氏の時代はヴィクトリア調だったから、『日本書紀』の中で神々のラブシーン、性行為が出てくると、アストンがそれをラテン語に翻訳しました。ラテン語が読めない現代っ子は常に不満で、私の授業評価がそれで悪くなって低かったのです。今度のベンテリー先生の翻訳は、いままでのその問題が解決できそうで、うれしく思います。

しかし、冗談抜きに、先生が 14 年をかけた『日本書紀』のきめ細かな研鑽の上の英訳は、歓迎すべきこれからの英語圏での定本になると思われます。ベンテリー先生がレジュメに書かれた、「多くの翻訳の難問は言語学を通して解決可能であることを強調したい」、という力強い自信に満ちたご発言は大変印象的で、これからのアメリカの日本研究の将来は大丈夫だと思って聞かせていただきました。

次はマセ先生のご発表ですが、『古事記』のフランス語訳について幾つかの大変重要なポイントを指摘されました。我々は日本の古代の文献を翻訳する際、翻訳者は外国の文化と日本文化の橋渡しになると思われますが、マセ先生は、「文化の違いだけではなく、時代のギャップを超えていかななくてはならない」とおっしゃいました。そうすると、現代日本語で読まれる『古事記』も、フランス語で読まれる『古事記』も両方ともが翻訳本だと指摘されました。学者以外の現代の日本人でも『古事記』が読めませんので、原文に読み下しを必ずつけることになります。読み下しは、現代人の翻訳・解釈で担うわけです。

そう考えると、翻訳者の仕事は言葉を正しく並べるのではなく、一種の創造・創作品になると思えばよいようです。そこで、技術よりセンス、ニュアンス、トーンの設定が大切になる。そこで、人名も翻訳するのが大切ですが、神々の名前が余りにも長くなると、かえって読者にとってはますますわかりにくくなります。やはり、おっしゃるように『古事記』は、詩、和歌、ポエトリーと考えたほうがよいようです。

次は、魯先生のご発表です。先生が何年間もかけて『古事記』を韓国語に翻訳され、そのご経験を踏まえて回顧を述べられました。先生のお話では、翻訳プロセスの中で、人間関係・研究者の交流がいかに大切かが、具体例を通して指摘されました。原文のテキストをどれにするか、敬語の扱い方などが具体例でした。これから翻訳をしようとしている若

手研究者にとりましては、魯先生のご発表は、非常に実用的な実際の役に立つお話でした。

また、漢字圏と非漢字圏の翻訳問題では、現代韓国のことをどう考えたらよいのかも問題です。歴史的には韓国はもちろん漢字圏の王国ですが、魯先生が先日の休憩の時間、たまたまされたお話によれば、いま現在、韓国ではハングルを中心とする現代教育では漢字を教えたり教えなかったりするので、若い人にとって漢字を読むのが苦手になっているそうです。出版社も、漢字を利用した原稿を嫌がるそうです。そうなると韓国は、漢字圏の国でありながら非漢字圏の要素が生じつつあるようです。

最後に、手短にマクロレベルに戻りたいと思います。私は『神道事典』の英訳プロジェクトに参加させていただきながら、いままでは翻訳のことを主に技術の問題として考えてきました。日本語のことを話す場合、「壁」のイメージがよく出てきます。つまり、翻訳に当たって日本語が一種の「壁」であるかのように、その「壁」がコミュニケーションを規制し、束縛するものであるように思われます。長い苦しい、ときにはおもしろくない勉強プロセスを忍びながら、「日本語」という壁を乗り越えたり、突入したり、貫通したりしようとするのが翻訳の本来の任務であると思ってきました。

しかし、きのう・きょうの発表には「壁」のイメージが全然出てこなかった。発表者は自分の国籍・国民性にもほとんど触れることなく論じられました。言葉の壁・国家の境・ボーダーなどのお話はほとんど出てこなかった国際シンポジウムになったことは、私にはとても印象的でした。どなたも、言葉のことを「壁」として話さなかったことを意味するのは、翻訳はもう、突入・超越・貫通の仕事ではなくなっているのでしょうか。それよりも、翻訳は創造・創作であることになるのでしょうか。

そうなると、単純な質問ですが、我々は何を創造・創作しようとしているのか、最終目的、目標は何でしょうか。そこで、我々のゴールは正しい翻訳であるのは言うまでもありません。間違った翻訳であきらめようと思っている人は、少なくともこの会議には呼ばれないはずです。技術の次元だけではなく、目標のイメージがはっきりすればするほど、目的実現の可能性が高くなるのではないかと思います。

長々とまとまりのないコメントになりましたが、活発な質疑応答を願って終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)



Ⅱ. 応答

【司会】ハーディカさん、どうもありがとうございました。こういうコメントは実に難しく、聞きながらすぐまとめるという作業は大変ですが、ポイントを押さえてコメントしていただきましてありがとうございました。そして、最後のマクロの問題というのはとても本質的な問題で、これは、討議の最後のほうでぜひ扱いたい問題としてとっておきたいと思います。

そこで発題者の方から、いまのコメントに触発されてということになると思いますが、ご自分の発表と、その後のいろいろな発表を聞かれて何かつけ加えたいこと、コメントされたいことがあれば、お一人ずつおっしゃっていただければと思います。それでは、ウェイマイヤーさんからお願いいたします。

【ウェイマイヤー】ハーディカ先生のコメント、どうもありがとうございました。もちろん、本居宣長だけではなく三島由紀夫など日本文学の中で盛んに起こる現象で、ご指摘を胸に置いて考え直します。

欠けているところをいま考えましたが、私たちすべての発表の中で、Key Terms の適当な訳し方は徹底的にやりましたが、問題のある長い文をどのように扱ったかということになると、あまりやりませんでした。もう少し具体的に、翻訳の際に実例を挙げればよかったなと思います。

【司会】それではマクナリーさん、お願いいたします。

【マクナリー】コメントをありがとうございました。3つの答えとして言いたいと思います。1つ目は、翻訳に対する態度ということですが、この5人の中では、私だけ翻訳を出していません。歴史を研究しているので翻訳が中心ではありません。だから、集中的に翻訳をしてはいません。

2つ目は、nativism の使い方について、もちろん、国学の翻訳として nativism を使えばいろいろ問題が出てくることありますが、私も使っています。ただ、範疇として、あるいは形容詞として nativistic という言葉を私は使っております。だから、「国学」という言葉の翻訳としては使っておりません。

最後には、orthodox ということですが、国学の正統性の証として、ある国学者、鈴屋の国学者の服部中庸という人物が、ある祝詞を書いて篤胤にあげています。それは、正統性の証として、気吹乃舎の門人によって宝物として取り扱われていました。もう1つは、その祝詞の中には、「正統（マサミチ）」という言葉が出てきた。だから、orthodoxy という観念は国学者もすごく考えていたと思っております。以上です。

【司会】ハーディカさん、いまの orthodoxy に関してのリプライで、よろしいですか。じゃあ、ベンテリーさん。

【ベンテリー】コメントをありがとうございました。十数年前に私は九州に住んでいましたが、そのときに、「国際化」という言葉が流行っていました。私が考える国際化は、こう

というようなシンポジウムでいろいろな方々が集まって自分の研究を分かち合ったり、情報を分かち合ったりする場だと思っています。ですから、こういう機会があったことを本当にうれしく思います。

また、私の発表に語弊があったかもしれませんが、「言語学は道具である」という言い方ですが、私は建築士として道具は幾つかあると思っています。「言語学」という道具だけではなく、歴史、宗教、思想とか、いろいろな道具があることを認識していただきたいと思います。ある学者は、「歴史」という道具だけで頼るので、グループとしていろいろな道具を使うことが非常に大切ではないかと思っています。その点では、この場が架け橋になればいいなと思いますので、ぜひ言語学者を村八分にせずグループに入れるようにしていただきたいと思っています。以上です。

【司会】ありがとうございました。マセ先生、お願いします。

【マセ】コメントをありがとうございます。僕が言いたいことを十分に理解してくださいまして、どうもありがとうございます。やはり、やりたいことには危険があります。というのは、*dieu* を使って自分の神話をつくるという危険です。できるだけ原文に近い翻訳しなければならないことはよくわかります。

そう考えたら、1つの問題があります。さっき、魯先生が敬語の問題を出されましたが、ヨーロッパの言葉には敬語はあまりないです。でも、『古事記』には敬語が出ています。その敬語をどういうふうに訳すのか本当に難しく、不自然になります。キリスト教の場合も、神様に対して敬語をあまり使いません。尊敬していても、敬語を使わないことが多いから、日本語の敬語の役割をフランス語に訳すのは普通でも難しいです。

【司会】魯先生、お願いします。

【魯】ありがとうございました。今回のシンポジウムで私も大変勉強になりました。特に、日本語・漢文・古代語を勉強していて、翻訳もなさっているベンテリー先生には本当に敬意を著したいと思います。

神道というのが日本だけのことでなくて、宗教なり文献なり、いろいろな面で国際化、海外との協力・共同研究をするためには、どんどん神道関係の文献が翻訳されなくてはいいと思います。そのためには、私みたいないい加減な人間でも翻訳できるように、その時には日本の方と協力してもらって翻訳する。そのようにして、どんどん翻訳されて海外の読者にも読んでもらい、また研究も進んでいく。そういうプロセスが大事ではないかと思います。

もう1つは、『日本書紀』か、『風土記』か、そのあたりをまた翻訳するのだったら、私の『古事記』の翻訳は87年、90年、99年、それぞれ出しましたが、自分の現状のキャリアによっても大分意見が変わっていくと思います。

いま韓国のほうでも日本の『古事記』や『日本書紀』の神話の研究が少し、いやかなり行われておりますので、前の翻訳を出したときは韓国人向きに出したということが確かにありますが、いま出すのだったら本文ではなく注釈のことで韓国人がどういうふうに解釈しているか、それを含めた翻訳・注釈書をつけて、作業をやっていけば日本の方にも役に

立つのではないか。これからやるのだったら、韓国における研究も踏まえた状況で注釈の作業をやっていききたいと思います。以上です。

【司会】どうもありがとうございました。今回の発題の中には実にさまざまなトピックといますか課題と申しますか、これから我々がともに立ち向かわなければならないいろいろな要素が入っております。いま私は『神道事典』の改訂翻訳の編集を担当しているわけですが、荷が重くなったというか、やはりこれだけの問題を意識しながら作業を進めているのは大変だということを改めて感じました。

それで、これから残りの時間をフロアの方にも参加していただいて、言い足りなかったこと、それから先ほどハーディカさんがおっしゃったマクロの問題も含めて議論したいと思います。

この翻訳という場合にいままでの例でわかりますように、ベンテリーさんのように、ほとんど日本人と同じように言葉の意味を究めて、どのような言語学的な説明が可能かというふうにはほとんど日本人のレベルと変わらないところから始まるわけです。その上で、それを翻訳する。そうすると、主たるところは解釈ということで日本人との対等な研究のようところがポイントのように思いました。そのようなレベルでの、つまり翻訳者であるけれども、直接その研究の最先端に突入していくというスタンスがあります。それから、ある程度それを避けてと申しますか、魯さんの場合には日本で信頼できる読みとか注釈を選び、それに基づいて翻訳していく。こういうやり方があります。そこはそこで、どれが適切かという問題もあります。

さらに、国学の文献の場合だと、古典を日本人が解釈した。いまの人ではなく、江戸時代の人が解釈した。それをまた解釈するという、そもそもが二重になっているところに翻訳の問題が絡んでいくわけで、これはまた非常にややこしい問題です。原典に対する態度をどうするか。そして、その原典に対する解釈の態度を翻訳者はどう定めるか。その二重の難しさが最初からあります。ですから、こういうものにかかわっていらっしゃる方にはそれだけで敬意を表します。外国のテキストに、私たちがそういう態度でどう臨めるかという、本当に大変だと思います。そういう方々に参加していただいたことは、本当にうれしいと思います。

そうした問題と、さらに日本でもそうですが、それぞれのお国でその当時の表現や言い方・感覚という問題と、現代人が読むわけですから現代韓国語、現代英語、現代フランス語という問題があるわけで、そうした時代の問題、それを考えながらやっていかなければいけないわけで、本当に大変な問題だと思います。そうした幾つかの問題が同時に出されたということで、そういう意味で刺激的だったと思います。

どの問題をというのはこちらからは申しませんので、いままでの発表・議論を踏まえたうえで、特にどの先生にということがありましたら指定していただいて結構です。それから、比較的マクロな問題であるからどなたに答えていただいても結構だという場合には、その旨をおっしゃってください。

Ⅲ. 自由討議

【司会】 それではフロアの方、どうぞ挙手をお願いいたします。はい、どうぞ。

【安蘇谷】 國學院の安蘇谷ですが、司会の井上さんからお話がありましたように、我々はこれから日本のものを外へ発信しなければならない。そういう時代であると考えているわけですが、そういう我々の意図を超えてというか、それ以前からそういう非常に大変なお仕事に携わってくださっているということで心から厚く御礼を申し上げたいと思っております。

それで、魯先生の場合にはサントリー文化財団からの援助があったわけですが、そういう出版に関してもっと日本政府がやるべきだと思いますが、そういうことで援助か何かあるのでしょうか。つまり、個人的に出版社に当たってやらなければならないような状態なののでしょうか。そういうことについてちょっとお聞かせ願えればありがたいと思います。つまり、出版しようとしたときにそういうことをお考えになったのかどうか。例えば、日本で何かそういう援助があるとか、もっと日本政府がやるべきだとか。そういうことをお聞きしたかったわけです。例えば、『日本書紀』を出版するのに個人で出版社に当たってお願いするとか、そういう形でしょうか。

【ベンテリー】 一応そういう段階です。援助があればうれしいですが、私個人としてはまだそこまで探していません。Japan Foundation とか、アメリカの政府から翻訳の援助もありますが、私がいま原稿を出している出版社はその辺を何も言ってこないのも、もしお金を要求するのならばまた考えなければならないと思います。

【安蘇谷】 日本文化研究所で何とかできるというのですけれども…。

【司会】 趣旨からすれば、我々は外国で研究されていることを知ったわけですから、日本側でもさまざまなルートで出版のための方法を探して教えて差し上げる。そのための努力をすることを確認するというのが、この場での趣旨かなと思います。それ以上をここでいろいろと議論しても、仕方がないですから。私も、できるだけ早い時期に公刊されるように努めたいと思います。たとえ部分的であっても、日本側が何か助成できる道があるならば、それを探るということを念頭に置きたいと思います。

ほかにありますか。はい。

【中牧弘允】 民博の中牧です。きょうのお三方の司会をした関係でちょっとお3人に質問をさせていただきたいと思います。きょう3人の先生方がしゃべれなかったことを聞きたいという趣旨でありまして、『古事記』と『日本書紀』を取り上げられたわけですが、それぞれの先生方が取り上げなかったほうの情報についてちょっとお伺いしたい。

例えば、魯先生は『古事記』を翻訳されたわけですが、韓国では『日本書紀』も翻訳されているということですね。そうすると、時間的にどちらが早くてどういう方が翻訳されて、そしてその副題にはどういうタイトルがつけられたかというようなことをちょっと説明していただければ比較ができると思います。

例えばマセ先生の場合だと、『古事記』の翻訳にかかわる含蓄のある翻訳というのは非常に難しいというお話をされたわけです。では、もしマセ先生が『日本書紀』を翻訳するのだったら「任せておけ。大丈夫、やってあげる」というふうな自信がおりなのかどうか。ベンテリー先生は、『日本書紀』に取り組みられておられるわけですが、『古事記』だったら14年間かけてやらなかった」とか。やはり、『日本書紀』で自分の言語学的な立場からそういう研究の成果を盛り込んだ翻訳は可能だけれども、『古事記』はちょっと苦手だとか。そのあたりのことを、それぞれにお聞かせいただけたときょうの話が膨らむのではないかと思います。

【司会】それではご質問された順に、魯先生からお願いします。

【魯】ありがとうございます。私の『古事記』だけではなくて、『日本書紀』も韓国では翻訳されております。お二方がやっておりました。お二方とも『古事記』、『日本書紀』の専門家ではなく、日本語世代の方です。戦前、日本人が現代語訳されたものをそのまま翻訳されているので、『日本書紀』『古事記』の研究者の立場からそんなにいい反応ではありません。そういう部分では、僕らの日本学をやっている連中は非常に責任を感じなければいけないのですが。

それからまた、韓国の古代史をやっているグループの中で、『古事記』よりも『日本書紀』のほうの輪読会をよくやりました。もちろんいろいろな理由があると思いますが、輪読会の連中は古代史のメンバーが中心になっていて、人類学・文学・日本文学をやっている連中は一切参加しておりません。非常に閉鎖的な研究会で、いまその研究会のメンバーは私よりも3つぐらい年下の人々のグループです。それはいま解体されています。『日本書紀』を輪読会でやりながら注釈の作業もやって、何とか翻訳本を出しましょうという話があったのですが、私一人になる可能性があるので（笑）。いま、どうしようかなと思っています。

それから『風土記』は、実は韓国学術振興財団のほうから『風土記』を翻訳してほしいという要求が去年ありました。また今年出ましたが、去年は応募者がたしかなかったのです。さっき申し上げましたように、いま韓国の大学が非常に悪い方向にいつているのは、先生方に成績表みたいに点数を課しますが、その中で翻訳は点数のない大学があります。皆さんご存じのように近代文学・現代文学の翻訳だったら別にいいのですが、『古事記』『日本書紀』『風土記』になると、始まるとなかなか終わらない作業で、『古事記』『日本書紀』の呪縛から逃げられない状況に置かれるのではないかと。そういう恐れで、みんなためらっていると思います。もし私がやるのだったら、『日本書紀』をもう1回やりたい。けれども14年間かかるのだったら、私はちょっと勇気が出ないですね。そういう面から見ると、日本で研究なされている方の力を借りたほうが手っ取り早い。それから、韓国人が見た注釈作業を行ったほうがいいのではないかと感じはいたします。

【中牧】副題のことについてはいかがでしょうか。

【魯】『日本書紀』はサブタイトルがなかったのです。

【中牧】それで売れたのですか。

【魯】理科系をやっていた先生が退官なさって翻訳した『日本書紀』は結構売れました。

全然関係ない人が現代日本語訳から訳したものはあまり売れてないのですけれども。

【司会】どうもありがとうございました。では、マセ先生お願いいたします。

【マセ】友達と一緒に、『日本書紀』と『古事記』を訳しましょうということで、彼は『日本書紀』のほうで、僕は『古事記』のほうをやっています。ただ、『古事記』と『日本書紀』は別の世界でありますから両方するのは本当に難しいです。頭を切り変えて『日本書紀』に入るようにする。もちろん『古事記』の訳をすれば、注にはやはり『日本書紀』を引用しなければいけない。『日本書紀』は最後には歴史の本になります。やはり『古事記』と大分違います。別の仕事になります。

【司会】ベンテリー先生、お願いします。

【ベンテリー】正直に言って、何年か前に『古事記』もやろうかなという気持ちもあったのですが、『日本書紀』の完訳が終わって、もういいです（笑）。しかし、私は大学院生のときに博士プログラムを卒業したときに、私の先生は私に「言語学者は『万葉集』を訳さなければならない」という、本居宣長が真淵からバトンを受けたような感じで、先生が私にそういうふうに言いました。その先生が誰にバトンをくれたかよくわからないのですが・・・（笑）。『日本書紀』よりも『万葉集』のほうが、多分英訳は難しいと思います。英訳は結構ありますが、正直言って、正しく英訳されているかどうかは疑問です。『万葉集』は非常に解釈しにくい部分があるし、多分意味が不明な和歌もあると思うので。ですから、本当に『万葉集』を英訳するかどうかは疑問です。

【司会】ありがとうございました。それでは、どなたか別の質問はありますか。はい。

【城崎】國學院大學のCOE研究員の城崎と申します。いま先生から『万葉集』の話が出ましたので、ウェイマイヤー先生のレジュメのほうに、『万葉集』の翻訳が今後重要ではないかというようなことが書かれていたものですから、その点についてちょっとお伺いしたいと思います。

ただいま先生も、韻文の翻訳というのは非常に難しいとおっしゃられていましたが、例えば、『古事記』を翻訳するとか、『日本書紀』を翻訳するということが以上に、何か壁になっている部分というのはありますか。例えば、わからない歌とか、意味のとれない用語以上に何かありますでしょうか。例えば『古事記』だと世界観が表しにくいとか、『日本書紀』だと歴史的な感覚が非常に強く入ってくるので訳しにくいとか。そういう意味で、『万葉集』はどういう点が難しいとお考えでしょうか。

【ウェイマイヤー】『万葉集』の翻訳が大切なのは、神道文献としての大切さだと思います。自分が翻訳しようと思う立場を考えておりません。ただ、『万葉集』を読むときに、昔の日本人の感情、日常生活の習慣、死、あるいは愛に対する気持ちが一番よく出てくる文献だと思います。それから、神様に対する気持ちも深く含まれているような気がして神道文献として大切だと思い、そういうふうに簡単に書いておきました。自分は翻訳する自信は、いまの段階ではないように思われます。

【司会】いまのご質問は、どこが難しいと予想されるかということですね。逆に言えば、もし、ウェイマイヤーさんが『万葉集』を訳そうとするときに一番ためらう、ここは難し

そうだなと思うところはどこでしょうか、というご質問です。

【ウェイマイヤー】15年前に広島大学の修士の演習で『万葉集』を勉強しました。漢字一字ずつ、その読み方は何であろうかというふうに詳しく細かく、一つの授業で多分5つも言葉を勉強できないでクラスが終わってしまいます。ベンテリー先生がおっしゃったように、どう読むかが一番問題ですね。読みが決まればあとは比較的簡単だと思います。

【司会】よろしいですか。それでは別の方。

【森】国際宗教研究所の森と申します。きょうのお話で、現代日本語訳も中に含めて、同じ土俵で翻訳が非常に重要であることが認識されたわけです。そこで、ハーディカ先生がコメントされたように翻訳というものが一種の創作であるとして、それだけの努力を払って、何を創作しようとしているのか、一体そこにどのような目標が描かれるのかということをご聞きしたいと思います。

また、きのう中井先生もおっしゃいましたが、ほかにももっと魅力的な文献がたくさんあるにもかかわらず、なぜ『古事記』や『日本書紀』・『古事記伝』などに魅力を感じられて、それだけ膨大な努力を注いでおられるかをお聞かせ願えればうれしいです。

【司会】これはどなたでもということですが、まず一番長い間翻訳されたベンテリーさんからどうぞ。

【ベンテリー】私は、日本に住んでいたときに本居宣長や賀茂真淵を勉強しました。彼らの勉強では、『日本書紀』をいつも悪者にしていたのです。「『古事記』がいい」、というふうに言われて現在に来ているという感じがどうしてもします。私は『日本書紀』を見て大切なところはいっぱいあるという感じで、やはり日本人とそれを分かち合うことができませんが、英語が読める人とは分かち合うことができる、という気持ちが最初にありました。

そして、アストン氏の英訳を見ると、どうも役割をあまり果たしていない。やはり時間がたっているから、私たち現代人はアストンの訳を読むと、どうしても『日本書紀』の味があまり味わえないかなということで、『日本書紀』の英訳に取り組みました。ですから、私の根本的な願望は『日本書紀』という世界を英語が読める人と分かち合いたいということです。

【司会】ほかの方で何か……、はい。

【マセ】本当は、どうして魅力を感じるのかは答えられないのです。でも、考えたら、私の場合、フランスの場合は神話のない国です。ガリア時代から神話がなくなって、ちょっと難しいところです。日本の場合はちゃんと、いまでもある意味で神話が生きているから神話の魅力から『古事記』に入りました。

【司会】よろしいですか。ほかにご質問はありますか。はい、どうぞ。

【松井】大阪国際大学の松井と申します。先ほど冒頭で安蘇谷先生から出版の話がちょっと出たので、話は終わっているかと思いますが。私、国際交流基金に10年ほどお世話になったものですからちょっと補足いたしますと、まさにきょうのこのプログラムと同じで「発信」ならば援助してくれるわけです。

ということは、つまり、日本の文献を外国語にしたものならば出版を受け付けるという

システムでありまして、私がいた間に『古事記』関係では、サンクトペテルスブルグから出ているロシア語と、スリランカのシンハリ語訳の全訳（全く読めないもので、一体何がどういうことになっているのかわからないのですが、目次だけ見れば、恐らく Philippi の重訳だろうと勝手に私は想像しております）、少なくとも、この2つを国際交流基金は出版しております。

それと、いまの話と関連して、きょうのテーマの「発信」ということですが、私が国際交流基金にいるところに、外国人の『古事記』研究を日本語にして紹介したくて、これを何とか援助してくれと言ったら、先ほどの規則で全く受け付けてもらえないんですね。魯先生が、何かこれから韓国人の注釈を集めたいとおっしゃっていたので、それを今度、日本人が読むという発想も非常に必要ではないかと思ひます。ですから、今回の「発信」となっておりますが、これを見ると非常に役所の発想をちょっと感じてしまいます。

それに関連して、お話の中で、マセ先生が『古事記』に関するご著書が、日本語では出ているけれども、フランス語で出ていないとおっしゃったと思ひます。これもおもしろいけれども、なぜかなとちょっと思ひたのですが。

日本人にはいままで翻訳ばかりの文化の反省がある訳ですが、むしろ外国人の研究を、特にベンテリー先生のは日本語にして読みたいぐらいですが、そういう時代が来ているのだなと思ひました。先生方は、自分の研究を日本人に読んでもらいたいという思ひがもしおありならば、どの程度かお聞かせいただきたいです。

【司会】いまのご質問は、英語なりフランス語になったものを、日本人に読んでほしいという要求がどれぐらいあるかということですね。

【松井】あるいは、読者対象を日本人として想定して研究していращやるか、ということですね。

【ベンテリー】私がこの2～3年で出した論文は、雑誌に出すときには評価されます。評価があがると「ぜひ日本語で出版してください」という。これはアメリカ人の学者が要望しているということで、やはりアメリカでも、こういう研究を日本で出版するようにという要望があるらしいです。私の場合は時間という問題で、私は一応日本語で出版したいという気持ちはありますので、時間があればやりたいと思ひます。

【司会】ウェイマイヤーさんはいかがですか。自分の英訳したものを、日本人を読者として想定されたことがありますか。日本人にも読んでほしいとお考えかどうか。

【ウェイマイヤー】もし研究論文でしたら、いまベンテリー先生がおっしゃったように、それはもちろんのことだと思ひますが、私の『古事記伝』の翻訳の注などは日本人に読んでいただきたいとは思ひません。研究論文は別ですけども。

【司会】いまの松井先生のご質問に関連しては、COEプログラムをやっている側からちょっと補足いたしますと、『神道事典』の英訳という、これは原典ではありませんが、やはり日本人が神道をどう理解しているかという事典的なものを英訳しているわけですが、この英訳をそのまま出すわけではない。一度英訳されたものを、さらに日本人が加わって改訂編集するという作業をやって、公開しようと思ひています。つまり、英訳というただ

訳してもらったということですが、そうではなくて、その訳で今度は日本人がどれほど納得できるかという要素も含めていく。だから、そこが一味違うと実は思っているわけです。

やはり、今後は相互関係というのでしょうか、お互いにお互いを参照する。韓国語になるとそれが大変難しいでしょう。日本人でも韓国語をやる人は大分ふえています、神話学なり『古事記』をやって、韓国語もできる人はどのぐらいかとなると数は少なくなります。しかし、それはいままでは少ないというだけであって、これからは増える可能性もあります。そうやって、お互いに参照する。そのことによって研究を向上させるという方向に21世紀は向かうべきだと思っています。ですが、これからやるところにあまり大風呂敷を広げられませんが、意図としてはそういうことだということを補足しておきます。

この問題は、先ほどハーディカさんがおっしゃったように、この翻訳を通して何を作っていくかという大きな問題にもかかわってくると思います。時間もだんだん迫ってまいりましたので、最後は、こういうことに絡まってのご意見等をフロアでも壇上でもいただきたいと思いますが、どなたかございますか。はい。

【山中】直接、そういうことに絡まってご質問ができるかどうかわかりませんが、私はまず、出版の問題は、神道がどう翻訳されているかというテーマ全体に非常に重要にかかっていると思います。それは、単にどのぐらいの補助が出るかとか、だれか補助してくれるかということではなくて、例えば翻訳の長さの問題、あるいは読者層をどこに想定するかということによって、翻訳者自身が何を念頭に置くかによって、翻訳の質も変わってくる。それから、本当はこうなのだけれども、出版の事情を考えるとこうしなければいけないとか、そういうような翻訳を取り囲む下部構造的な問題として、出版の問題というのはきちんと議論をしなくてはならない問題群だろうと思います。これは質問ではなくてコメントですが。

私が質問したかったのは、今回、全体の問題として、一番はじめに、「神道」という問題についてやはり議論をする必要があるだろうという話がありましたが、そこに関係しています。翻訳を考えるときに、恐らく、それを論ずる場合に幾つかのレベルがあって、それで一般的に、ある言葉をほかの別の言葉に移し変えるときに出てくる問題群が1つあるわけです。もう1つは、例えば7世紀の文献というような、そういうさまざまな特殊事情を考慮した上での難しさという問題がある。最後の問題ですが、しかし同時に宗教という問題、つまり「神道」をどう翻訳されているかという問題に関係して、つまり、それぞれの翻訳された方がこの「神道」という、つまり『古事記』とか、あるいは『日本書紀』とか、あるいは、ちょっと違いますが『古事記伝』とか、そういう神道の教義に間接的にあるいは直接かわるような、そういうものを翻訳するというような意識を、翻訳のプロセスの中でどのぐらい意識されているのか。例えば聖書であれば、先ほど出てきましたが、訳すときには必ず宗教的な真理をいかに正確に伝えるかというような問題を考えて、そういう問題として問題が立てられるはずだと思います。

特に最近の人類学等の研究等でも、聖典が翻訳されるプロセスの中でどういうふうに文化的な植民地支配とか、そういういろいろな問題がそこに介在しているかといった問題、

聖書の翻訳の場合には特にそういった議論がよく出てきます。今回の場合は、そういう聖書みたいな聖典宗教の問題がそのまま今回の問題に反映されるかどうかわかりませんが、単純に翻訳の問題ということではなくて、もう1つ、宗教的な性格に絡んだ形で翻訳ということはどうとらえるかということです。時間もあまりないと思いますが、私の質問にある程度答えておいたほうがいいだろうと思っている先生で結構ですが、何かお答え願えればと思います。

【司会】マクナリーさん、いかがでしょうか。

【マクナリー】先生がおっしゃったことは私もそう思いますから、翻訳しません。用語までどう翻訳するかということに集中したら翻訳はできない。だから、しません（笑）。

【司会】魯さんはいかがですか。

【魯】難しい問題ですね。さっき申し上げたように、『古事記』だけでも、宗教的な性格として翻訳すべきなのか、歴史的な文献として訳すべきなのか、という問題があります。それ以外の文献でも、そこまで要求されると……。

【山中】別に要求しているわけではなくて、「神道」を翻訳しているという意識が、つまり、「神道」の意識、そういう問題意識があるかどうか。その辺を議論したほうが最後にはいいのではないかと。まあ、最後かどうかわかりませんけれども。

【魯】私は複雑ですね。

【司会】「神道は」と言われると、なかなか難しいと思います。前回のシンポジウムでも、「神道研究」という意識ではないということもありましたので……。

ただ、別の形で私から質問させていただきたいのは、マクナリーさんのときに私が最後にちょっと申し上げたことですが、翻訳するときに、自国の宗教文化の言葉を使うのかどうかということです。日本の場合も、例えば「god」を「神」と訳したことが間違いであるというような議論がよくされるわけです。つまり、母国語の中にあるどの言葉、どの概念を当てるかということは相当重要な問題なのです。

そのときに、例えば、eschatology というような語を選ぶというのは、単に翻訳という問題だけではなくて、自国の中にシェアされている宗教タームを使う、という選択をしたことになるわけです。これは、その人が好むと好まざるとにかかわらず、日本の文献に自分の国の宗教的なニュアンスを含めた、という行為になってしまうわけです。

その辺のことで、キリスト教文化圏であればキリスト教的な、韓国であれば、韓国の宗教的な伝統の色のついた言葉を選ぶことについてどれぐらい意識されているか。逆に言えば、それは非常に重要な問題だと悩んだことがあるかどうかという形で質問すると、似たような問いになると思いますがどうでしょうか。苦節14年のベンテリーさんはいかがでしょう。

【ベンテリー】そうですね。私は宗教のある人ですから、ある程度、完全に脱皮することは難しいと思います。でも、さっきの山中先生の質問にもありましたように、できる限り日本の7～8世紀の状況を考えて翻訳しようと思いました。例としては、『日本書紀』には「天皇」という字がよく使われますが、「天皇」という呼び方だったかどうかは非常に大きな疑

間だと思えます。

ですから私は、「天皇」を英訳したときには、日本語の「大王（おおきみ）」というほうを使って翻訳をしました。ですから、私はできる限り当時の状況を考えて英訳したつもりです。やはり私の英訳が実際に出版されれば、あちこちに私のキリスト教の影響が出てくる可能性は否定できません。

【司会】「大王（おおきみ）」というときには、英語ではどう……。

【ベンテリー】Great Lord。王様の King という選択もありましたが、「大王（おおきみ）」はやはり Great Lord のほうが近いのではないかと。どうしても、Emperor を避けたかったのですね。

【ハーディカ】いまの井上先生のご指摘について一言言わせていただきたいのですが、ある意味では、自分の母国語が持っている宗教関係の言葉を使わないとどうなるか、ということをも論じなければならないかと思えます。かえって、そういう宗教心に全然汚染されていない言葉ばかり選ぶと、先ほどの Nativism とか、National Learning とか、読者に別に意味がない、あるいは空洞化されたような言葉でしかなくなる。そうなると、原文が持っている宗教的な力や精神がかえって伝わってこない恐れもあるのではないのでしょうか。

【山中】それに関連して1個だけ、神道はいわゆるキリスト教と違ったタイプの宗教ですから、同じ類比を考えてはいけなないと思えますが、ただ、例えばキリスト教の場合で言えば、キングジェームズのバージョンのバイブルというものを特定の人はずごく大事にする。つまりその意味で、宗教者、信じている側の人が「この翻訳でなければ困るよ」というようなことがキリスト教の文脈ではかなり行われていた。だから、聖典の翻訳については相当慎重だし、何度も何度も繰り返しそういう問題が出ている。

その場合、今回ご発表いただいた神道の関係の先生などにお聞きしたいのですが、そういうことについては神道の側からは別に「まあ、どういう翻訳をされようと、それはそれですから」というような態度なののでしょうか。そこのところもぜひ、いまの議論の中で、例えば、安蘇谷先生にお話しいただければと思います。

【安蘇谷】その点については、やはりあきらめています。なぜかと言うと、神道、あるいは日本文化などを、実証的・科学的・客観的にやるというのが最初から井上さんの目的ですから。つまり、それは文化であって、キリスト教の場合、キリスト教の世界にはそういう力がある。日本にはいま神道の力がそれだけないわけです。だから、戦前だったら、天皇陛下に対して我々は「天皇」などとなかなか言えないわけです。そうすると、「天皇陛下」と言わなければいけない。そういう力があつたわけです。そういう力をネグレクトして研究したいというのが彼の立場ですから、それと、「神道」は多少齟齬があつてもやむを得ないところはあるというふうに、もし神社本庁の代表が来たとしてもそういうふうにおっしゃるのではないかと想像いたします。答になっているかどうか……。

【中井】神道はどう翻訳されるかということで、『日本書紀』と『古事記』だけを翻訳することによって神道がわかることはないのではないかと思います。要するに、どうして『日本書紀』と『古事記』は日本の神道にとって大事だったのかということ、繰り返し解釈され

翻訳されたということがあるわけですね。一条兼良の『日本書紀』と、吉田兼俱の『日本書紀』と、鈴木重胤の『日本書紀』はかなり違うものではないかと思います。それで、結局、元の『日本書紀』が英訳されても、その伝統は浮かんでこないのです。そして、その伝統全体を英語に伝えないと本当の神道は海外でわかってこないのではないかと。

ですから、例えば英訳かほかの言語での訳を日本文化研究所が援助されるなら、やはりもともとの原典ばかりでなく、どういうふうに解釈されたか、ということの翻訳もぜひ心がけていただきたいと思います。

【司会】先ほど、私がネグレクトしていると言われましたが、ネグレクトしているつもりはないです。例えば、神学的にこういう解釈があるというのが出されるならば、当然注釈書でも触れる人はいるとは思いますが。ベースが学問的な議論の中でやっているということであって、学問的なベースの中には当然、神学的な解釈についてのレファレンスがあり、それはどの学問でもやっているわけです。つまり、学術的なものだけではなくて、例えば、当事者たちの解釈というものはこういうものであるとか、それについて何通りあるとか。だから、私はむしろ神道神学をされている方がどしどし発信されれば、この問題はもっとおもしろくなるというふうに思っています。

【安蘇谷】井上さんの言っていることはよくわかるし、私も別にこれを否定しているわけでも何でもありません。むしろ、たとえ誤解されようが、まず発信してもらうことが本当にありがたいという気持ちが強いです。

ここにいらっしゃる方々は世界じゅうで数えるほどしかないわけです。つまり、我々がヨーロッパに出かけて神道の話をしてほとんど興味を持たれない。一般的にそれが普通だと思います。私もある学会に行ってもしゃべっても、そんなに興味を持たれないわけです。ヨーロッパへ行ったり、アメリカへ行ったりしても。

そういう中で研究されていることに対して私は敬意を表することと、神道が現代において、これからどういうふうに行っていくかなければならないかは全く別の問題ですから。私はこういう機会が非常に有意義なシンポジウムであるという評価を持っているわけです。いま言った神学的な問題に関してとか、神道をどういうふうに現代の社会において生かすとか、それは全く別の問題だと思います。そういう意味ですから、誤解のないように。

それから、先生にちょっとお答えしたいのは、我々が、神道の立場からいえば神話ではないと言いたいのは、やはり『古事記』・『日本書紀』にしか神々のご意志というのはきちんと出てこないのではないだろうか、そういう理解をしたのです。

ですから、本居宣長もあそこにまさに天武天皇以来の正しい伝承が伝わったと信じて、それで翻訳されているわけですから。その翻訳の仕方というのは、全くいまの人たちが、例えば西郷信綱が『古事記』注釈をやっていますけれども、あれは、自分が信仰の立場から全く離れて客観的にやろうとしているわけですから、それと宣長とは全く違います。

我々は、古伝承の中に神々のご意思を理解しようという立場であるということだけ、申し上げたいと思います。

【司会】時間が一応過ぎましたので、最後に一言ずつ発題者の方から手短に、シンポジウムの感想を述べていただいとおしまいにしたいと思います。これはCOEが続く限りやろうと思っていますので、きょう別に結論が出なくても、引きずっていろいろやりたいと思います。ウェイマイヤーさんから一言ずつお願いいたします。

【ウェイマイヤー】外国人がどういうふうに神道文献を解釈し、翻訳するかということについて日本人が興味を持つとは思いませんでした。こういう機会をいただいたことを一生忘れないと思います。心から、誠にどうもありがとうございました。(拍手)

【マクナリー】まず、来させていただいた機会を非常にありがたいと思います。非常に勉強になりまして、これから翻訳しようかなと思っておりますが(笑)。まあ、テニユアをとった後、そういうチャンスがあればそうします。どうもありがとうございました。(拍手)

【ベンテリー】私も、こういう機会に恵まれて非常にうれしく思います。また、多くの方々が私の『日本書紀』の英訳に関心を示してくださることは、気絶するほどうれしいです。また、國學院大学のスタッフにも大変感謝しています。ありがとうございます。(拍手)

【マセ】今年、2回も招待されて本当にうれしく思います。いつも短いと思ってしまうので、もっと長く論争を続けたいと思います。今度こそもう一度、日本だけではなく、いつか外国で、例えばフランスでやりましょう。(拍手)

【魯】ありがとうございました。今年から『古事記』を翻訳するときに、ヨーロッパ文化圏の方々の解釈・注釈のことは全く意識していませんでしたが、本当に今回がきっかけで英語圏・非漢字文化圏の翻訳がかなり複雑だな、難しいのだなということを痛感いたしました。本当に勉強になりました。どうもありがとうございました。(拍手)

【司会】ハーディカさんも何か一言お願いいたします。

【ハーディカ】私もまた、2回続けてお呼びいただきまして誠にありがたくうれしく思います。それと同時に、COEプロジェクトの『神道事典』の英訳プロジェクトに参加させていただいて、プロジェクトのことを振り返ってみると、戦後もうそろそろ60年にもなりますけれども、その長い年月において、私たちからすれば、『神道事典』が、神道の参考書としては戦後において一番大きな業績であるのではないかと思います。それから今度は、英語に訳されることは大いに歓迎すべきだと思うと同時に、ますます諸外国においてより広く知られるようになるといいなと思い、これから何とかしてこのシンポジウムがより広く知られるようにしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

【司会】本当に長時間と申しますか、2日間にわたってご参集いただきありがとうございました。これを企画したときにはどういうふうになるのかと、自分で思い描いたものはありました。しかし、私は実際に神道文献の翻訳を経験しているわけではないので、具体的な問題についての想像に限界があったわけですが、発題者からレジュメをいただいて「ああ、これはおもしろくなりそうだ」という感じを持ちました。そして実際に開催しましたら非常に刺激的で、会場からの質問も大変多く、多分全員が大きな刺激を受けて、またさらに次の一步に進めることができると考えております。

このCOEプログラムが継続している間、ぜひともこの国際シンポジウムを連続して行

い、形成されつつあるこうした国際的なネットワークをさらに深いものにして、すぐれた研究をシェアできるようにしようと思います。また、お互いが何を言い、どんなものを刊行しているかを知って、それぞれの国における研究のレベルを上げて行きたいと思います。特に神道研究は日本でもやはり少数で、各国においても少数ですが、その少数が互いにネットワークをすることによって国際的には大きな力になり得る。かえって、小さいがゆえに密度の高い成果を出せる可能性もあると、その点はむしろポジティブに考えております。したがって、これからの我々のプログラムにもご理解いただき、積極的にまた今後参加していただき、さらには、ここでできた個々のつながりを大事にさせていただいて研究に資していただければと思います。

なお、12月7日には、神道宗教学会の開催とタイアップいたしましてミニ・シンポジウムということで、国外から1名か2名、また国内からも1～2名お招きして、きょうのテーマと連動させて、これを多少補う形でできればといま計画中でございます。その切はまたご参加をいただければ、我々としては幸せと思っております。2日間、本当にありがとうございました。御礼を申し上げます。(拍手)

これにて、シンポジウムを終わりといたします。